

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	児童の言語生態学の構想 <20周年記念講演会講演要旨>
Author(s)	野地, 潤家
Citation	児童の言語生態研究 , 14 : 51 - 53
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045160
Right	
Relation	



ありますので、その所を大事にしたい。だから子供の視点にたつて、今子供はそこで何を考えているのか、何をイメージとして描いているのか、そのイメージが次はどういうイメージの所へ移っているのか、それを言葉を書きながら、言葉の記録をとりながらさぐっていくことを大事にしたいですね。

親とか先生というのはいつも、子供と前を向いて話しを聞くことが大切ですね。子供の顔つきとかね、それこそ生感というんですが、それを見届けるにはやはり真正面むいていないとつかめないんじゃないかということ。

最後に、子供がどういうイメージを持ち、それがどう流れていくのか、思考に流れがありますが、もう一つ考えたいのは、流れに方向性があるということね。イメージは固定的なものではありません。それがだんだんとふくらんだりして変化してこう動いていきます。その動き方にある種の好む方向性と、あまり好まない、あるいは得意としない方向性がある。これをプラスマイナスという形で呼んでおりますが、私達は子供を叱る時に子供が何か悪い事をしますと、親は何であんなそんな事をしたの、言つて

みなさい訳を、とこう言いますが、その訳というのは実は子供にとつてはマイナスの方向性のものです。というのは前にさか上つて聞くわけです。だから子供はこうイメージが湧いて流れて行く方向性というのとはちがふかと、これから先の方向性、つまりこれからおこり得るだろう未来の方向性、これをあなたはなぜそれをしたの、訳を言ってみなさい、訳つていうのは実はこれから先の方向性ではなくてむしろ、この前のできごとですね。これが結果であります。原因はこつちにある、時間的に前のことなんですね。大人はそういう考え方で因果応報といひまして前に悪い事があると悪い結果がおきる。ところが子供にとつてはイメージあるいは物の考え方の方向性というのは元へもどるのではなく、先の方向へという方向にプラスの意味を感じてますから、本当は何をしたかだったのか、その過程にこれがあつた。先はプラスかもしれない。何か子供は良い事をしようと思つてたまたま、これはマイナスだったかもしれない。子供の顔をよく見て、本当は何をしたかだったかという問いかけがあつても良いのです。

子供にお話をきかせたり絵本を見せると、親は終つた時点で元へもどつてお父さんは何をしましたか。その次は何をしましたかという形でもどつてくる。そうではなくて終わつたらそれからどうしたんだらうと、先へもつてくるんです。読みながら次の世界を作り上げていくそういう所を考えていく必要があると感じております。私達は常にいつも子供の話から前の出来事を大人は考えがちです。むしろ会話している所から次の方向もありますのでどうぞいづつ、お話をきかせたりする時、元へもどるマイナスの方向で、いつも元へもどるといふような事はやはり少し注意しなければいけないと思います。話のそれからの先という方向を考えると子供というのは表現の意欲が高まつていくだろうと思ひます。

最後に子供のことはといふのは、そういう意味だつたという過去の記述ではなく、むしろのびていく、これから新しいものを発見していく、そういう方向性を持ったのが子供の言葉ではないかという事を感じております。

児童の言語生態学の構想

前全国大学国語教育学会々長・広島大学名誉教授・鳴門教育大学副学長 野地潤家

一、児童言語学への軌跡と課題

綴方教育や小学校の国語教育に熱心に取り組んで

おられた、慶応幼稚舎の菊池知勇氏は綴方教育や読み方教育の基礎学としての児童言語学の必要性を感じられまして、昭和十二年、それを「児童言語学」

という書物に体系的におまとめになりました。これは、その方面の先駆的業績であります。

また、児童の使用語彙の実際にせまらうと調査を

行い、さらに国語指導のあり方にまで及んだ、昭和十九年の「児童の言葉と国語指導」(長野師範学校男子部附属国民学校教科研究会)、児童特有の言葉を採録し分類して子どもの世界の独自の言葉の生態を明らかにしようと試みた、昭和二十四年の「分類児童言葉」(柳田国男)、欧米の文献を紹介し、内外の研究成果をまとめて児童の言語の研究の到達水準を明らかにしようとした、「児童の言語」(矢田部達郎)など、菊池知勇氏の「児童言語学」が全般をおおうような組織になっているのに対し、児童言語学の独特の領域を切り開いたものがあり、高く評価されます。

そして、「はなちがナンでえー子どものことばの記録」(児童の言語生態研究会/上原輝男編)が昭和五十六年に出されました。これは、言葉の記録(スナップ)という新しい解釈といえますか、意図、ねらいを盛り込んだ報告で、新しい視角から児童の言葉の生態が捉えられており、ここにも児童言語学構築への新しい胎動を見出すことができます。

二、児童の言語生態学の構想 その一

昭和四十三年に、日本放送出版協会から、「ことばの誕生―うぶ声から五歳まで」という書物が刊行されました。これは、子どもの声(言葉)を録音して、音声生理学者、教育心理学者、国語学者、大脳生理学者などの協力のもとに、その採集されたものを考察したもので、NHKラジオでも、教養特集「ことばの誕生」として放送されました。

この書物のあとがきには「言葉の誕生は一口にいつて人間の研究であり、それは生命力の追求であったといっても過言ではない、と録音取材班は信じています。遅い産声を聞いた時、その産声の中に人

間としての機能・ファンクションが、すべて収斂されています。収められていることを発見した時、さらに一音一音を母親の口元から学びとる過程の一つ一つの事象の中に、取材班は、人間の生命の活力に強い感動を覚えました。」と述べられています。

児童の言語生態研究会は、この放送が終わった翌年の昭和四十三年に発足していますから、歴史的に見ましても、このつながりは見逃せないものがあります。

昭和四十六年には、「ことばの生態学」(神島武彦)が出まして、その中で、徳川宗賢氏の次のような言葉を紹介しています。

「言葉の存立に関するあらゆる条件を取り上げうる学問の名称が求められてくるのは自然である。ここには、『言語生態学』(リングスティックエコロジ)という名称を提案する。」

しかし、神島武彦氏は、「言語生態学は、現時点では学問としての体系を持つていないわけではないので、『言語生態学』(リングスティックエコロジ)といっても、文化科学としての生態学的研究などは、まだ流動的なので、それまでのところは、言葉そのものを、生きた姿を捉えていくという意味で、『その言葉の生態』(ランゲージエコロジ)という言葉を使いたい。」といっています。

昭和五十七年には、村石昭三先生が、「言葉と教育」を著しました。幼児期における言葉の教育のありようを根底から積み上げていくという努力を、終始三十年間続けられた成果であります。直接、「生態学」という言葉こそ使っておられませんが、言語生態学と言語教育学とは、響き合う形、あるいは、両方が相乗的な役割を發揮することによって一層効果を高

め合うようなことができるのではないかと思います。

昭和五十八年には、「感情教育論―子どもの言語生態研究」が、主宰の上原輝男先生の著書として刊行されました。先生の独自の観点とアプローチの仕方、取り組みの仕方が見られ、研究者として、子どもの言葉というものを取り上げる時に、どういう構えで、どういう気持ちを持って受けとめて行かなければならないかということに関して毅然としたものが随所に散りばめられておりまして、生半可な気持ちで手にとったのでは押し戻されてしまうような印象さえ抱きました。大変注目すべきものです。

また、西尾実先生の「言葉とその文化」(昭和二十二年刊)では、言葉の実態に即して、文字言葉だけではなくて、話し言葉の実態、本質、それから、言葉の本当の働きというものを目を開いて、言葉の教育に、国語の教育にあたらなければならないと力説していらつしやいます。

言葉そのものが見え、捉えられなければならない、言葉の教育論・国語教育論というものが、ものまねか形式的なものに傾いてしまうということ、つまり、本物の我が国の地肌即した言葉の教育こそ第一として考えなければ、生い茂っていく言葉の教育とはいえないのではないかと、私は受けとめました。

波多野勤子先生、鈴木清先生の共著で、昭和二十六年に出されました、「小学生の指導十二月」というのがあります。心理学者の立場から書かれたもので、「言語の発達」というところに、各学年別の発達の特性がとらえられています。

おそらくは、戦後五年くらい前の二十年代前半までの発達心理学、その他の調査研究をふまえてうまく整えて、お述べになっているものだと思いますが、

裏付けになるもの、生態にあたるどころ、事実にあたるところが欠如しているために、読んでいる者に知識としての理解はできませんけれども、それ以上につき動かして、新たなものをこう捉えていくという風になりにくいのが大変残念なことでした。「幼児期の言語生活の実態」(野地潤家)は、昭和二十三年から六年間、私の長男がどういふふう言語を習得したかということについてのおとづけ・対話例をもとにして報告させていただいたものでございます。

三、児童の言語生態学の構想 その二

主宰が一番求められておられましたのがこの点だろうというふうにございます。今後に向かって、実際に言語生態学の構想を組むというような場合に、これはまったくの私見ですが、たとえば、言語活動の一つの視座を求めて、ひとりごと系、対話系、話し合い系、会話系というふうにする、その生態のおさえ方というのが、腹が決まってくるということになるかと思えますし、また言葉の生活が営まれる場を中心に、家庭における子どもの言

葉の活動・生活の営み・学校全体と学級、さらにはグループとその中の親しい友達というふうには、いくつものに類別が可能だと思えます。

また、物語(虚構)の中の子ども達が発する言葉、あるいは受けとめ方というのが、象徴的とはいいますが、そこに現実よりもっと真実のものが描き出されているということになりますと、その児童文学に描かれる子ども達の生活と言葉のやりとりを、どう素材系列と表現系列というふうに対応し合うものとして見るのかどうかという問題があり、児童文化を言語生態学の視野の中にどう位置づけるのかという問題があるかと思えます。

当然、書き言葉の生態・実態というものと話し言葉のそれとの両者の関連となると、生態学の構想は広がるばかりという気がしますが、ある時点で子ども達が書いた物を見ると、ある時期での時代・社会の本当の姿の一端というものを写し出している、その写し出されてくる面に生態の断面・横顔というものを読みとることは可能だと思えます。

分析的に言葉そのものを追いつめる仕事

子どももののち復活のツボ

——イメージ学からの視点——

お早うございます。藤岡でございます。

上原先生にものごい題を頂戴しました。私自身は子どもがありませんが、子どもというのは、おもろいものやなと思っております。子どもの物の見方

……それはどこからくるのかという疑問は、逆に子どもを持った方よりは鮮明にあります。

今や学問はあまりにも専門的に高度になりました、我々人間の事に関する事まで、こんなに難しく

と、言葉の中へ中へと、あるいは言葉そのものを捉える仕事と、その言葉が生きて働いている、それをまるごと捉えていくのを生態の方とし、その生態として捉えられたものを限りなく析出して動かないところまで、文法の面・語彙の面で、あるいは、その書き言葉ですと、表記の面で、それをずつと対象に据えた上で、詳細な、科学的な取り扱いに耐えうるようなものにしていくわけです。

村石先生を中心とする国語研究所がなさったように、数量的(計量的)な操作を加えてゆるぎのない事実として出すようなものに対して、生態学的な接近、取り組みをどうするのか、ということもありますが、(言語生態学が)固有の領域をどう設けるか、さらには、関連領域・隣接領域をどういふふうに見るかという、その生態学的な研究のあり方というもの、の研究上の見取り図というものは、もうだんだんに描けるのではないかと、そういう気持ちもいたしております。

大手前大学教授 藤岡 喜愛

専門化された時に、私たちはこれで満足やと言えるのかと、そういう感じが募って参りました。私達が欲しいのは、難しい専門用語によるのではなく、それをできるだけすばつと、なるたけ少ない基礎概念